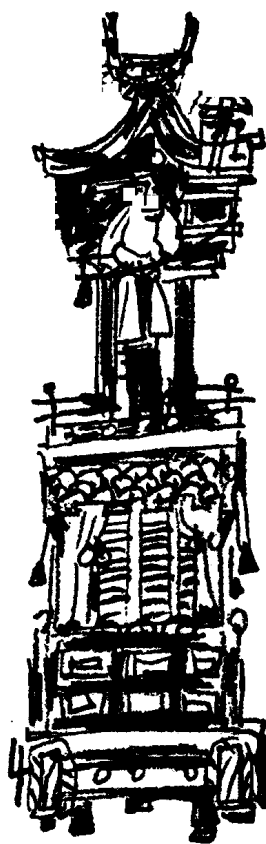


下々の女

江夏美好



河出書房新社

〈著者略歴〉

大正12年、岐阜県神岡町に生まれる。
昭和24年「南海鳥獣店」で新潮文学賞佳作入選。
著書に『脱走記』『流離の記』の長篇のほか短篇
集『炎星』など。同人雑誌「東海文学」を主宰し
て10年、その間「文学界同人雑誌優秀作」として
「文学界」に「幻想の刃」が転載された。

現住所 名古屋市千種区池上町一丁目一ノ二二

下々の女

定価七八〇円

昭和四十六年二月十五日 初版発行
昭和四十六年六月三十日 七版発行

著 者 江 夏 美 好

装 幀 者 佐 藤 忠 良

発 行 者 中 島 隆 之

印 刷 者 中 内 佐 光

発 行 所 株式会社 河 出 書 房 新 社

東京都千代田区神田小川町三の六

電話東京(〇三)二九一三七一一

振替 東京 一〇八〇二

下
々
の
女

飛驒は「^ゲ下々の国」である。

大化の改新（西暦六四六年）のおり国制を「大、上、中、下」の四等に定められたが、飛驒は山また山の辺鄙ゆえ、下国のなかでも、「^ゲ下々の国」と呼ばれたという。

一の章

一

飛驒白川郷は、烏帽子岳にみなもとを發した庄川上流の、溪谷地にあった。この庄川は、北流し越中との国境を越えて射水川となり、日本海にそそぐまでの延長は約三十里。そのうち平野を流れるのはわずか八里で、あとはみな山岳地帯である。白川村は川にそつて帶狀に点綴したひろい土地であり、中切、大郷、山家と三つの地方に大別される。

明治十八年五月——ちなは、中切地方の平瀬部落にある、たろえもの、末子のびいに生れた。たろえものでは、びいばかり四人つづいて跡とり息子の太右衛門が生れ、そのあとの女兒であつた。

飛驒では赤兒のことを「へぼさ」とも「ねんね」ともいう。男の子を「へぼう」もしくは「へでち」といい、長男なら「兄ぼう」とだいじがくるくせ、次男以下は「おじぼう」と輕んじる。女兒の総称は「びい」であり、「びんた」とも「びんちゃ」ともいう。男女を問はず末っ子となれば「おとこ」といい、「おとんぼ」と呼ぶのは、手近な親愛感をふくませた蔑称であつた。

ちなは飼馬桶に似た漆めりのつぶらの中で、襦袢がよければ泣き、ひもじくなれば泣き、退屈すれば泣き、眼ざめているかぎりは泣きつづけた。

ちなの周囲の大人たち——祖父母まつい（傍系家族）や、父母まつい（直系家族）のおじ、おばたちが、「眼玉はっかりぎよろんとでっかくてよ、まこと泣きべそ顔のへぼさじやのし」と、ちなの顔をのぞきこんでも、抱きあげてあやしくくれる閑人はいなかつた。ただ上の子供たちが、「ねんね、泣くな」と、つぶらに手をかけて、がつたんがつたん揺すぶってくれるだけである。

赤兒の泣声はあわただしい食事ときでも、夜なべ仕事のあいだにも、氣ぜわしくみんなの耳にまつわりついたけれども、

「泣いて泣いて、泣ききつてこそ、やがて息のながい古大臣も歌えりや、白川輪島まで歌いこなすえ声になるんじよ」と、誰も氣にかけようとしなかつた。烏と赤兒は泣くものときめてかからねば、自分たちの仕事のはかがゆかないのである。

「たろえものとかじや、またびいのへぼさが生れたとよ。羨しいことじよ」

と、部落の人々はいった。

人々は、終生家の厄介者である女の、しかも五番目の娘の誕生など、羨むはずがなかつた。ただよい衆にはよい運がそなわっていると、盲目的に信じていた。

慶長（一六〇〇年）のころ、この部落には三軒しか家がない。

かった。それが元禄（一六九〇年）以前に、たろえもの財産を二分して、すけくろうの家ができ、さらに、たろえもの財産の四分の一をもつて、たへいの家ができたという。また、大谷派本願寺の常徳寺からは、じへい、ろくべいが分家し、さらに信州から山を越してきて住みついたから山越と呼ばれる家とて七軒になったといわれ、元禄から現在の明治にいたるまで、七軒の家は變つていなかった。

たろえもの、間口庇とも十二間、奥行六間の切妻合掌造りの茅屋根の大きさも、家の構造も、そのふるびかたも、部落の他の六戸と大差ない。それでもたろえものは「へええ衆」と、昔からいいたえられてきた。

たろえもの家には、金無垢（ひたれ）のぶんぶく茶釜があるという。由緒ありげな生絹や、紗の直垂に、武具がそろっているといわれた。事実、仏間には穂先に金欄の袋をかぶせた見事な槍が飾ってあり、ふるびた槍の十数本は、合掌屋根の羽交にさしてあった。

赤児を生後一年半ぐらい入れておくつぶらも、ふつうは藁で編んだまるい籠か桶である。たろえも直系の赤児だけは、漆ぬりの黒光りした古風な桶であることも、いわくありげであった。厩の天井裏に放りあげてあったのを、先代が見つけたして利用しはじめたという。銅馬桶であったとしたなら、なにさまこそ乗られた名馬であつたろうと噂された。

たろえものは、鎮守の森の下にあつた。土地の人々は、敬神、敬仏の念がことのほかあつい。その昔に、八幡さまと隣りあわせて屋敷をかまえた先祖は、かくべつえらい衆であつた

たろえもはまた、部落の水頭であつた。八幡神宮の境内下からわき出る清水が部落の飲料水で、まっ先にその水を使うのがたろえも一家である。

生涯を家から離れぬ女の子でも、成長すれば百姓を扶け、家を助ける労働力となる。たとい五番目のびいの子であろうと、ええ衆にはええ運がついてまわる、と人々はいつた。

このびいが、森下ちな、と三月おくれて村役場に届けられた。さち、なつ、というおば二人から、一字ずつもらつたのである。姉娘の、いの、たよ、ふで、りきも、それぞれたくさんいるおばの名を一字ずつもらつて命名した。

たろえもというのは、代々呼びつがれた先祖名で、昔は百姓たちに姓がなかった。明治になって姓をつけねばならなくなり、家長たちが集り、智恵をしばって考えたという。まずたろえもは、宮の森の下だから森下とつけた。そこから坂になつていところの、すけくろうの家は、坂の本にあるから坂本とつけ、たへいの家は坂のつぎにあるから坂次とつけた。じへいでは家の前後を谷川が流れ、梨の木がそばにあるからとて梨谷と呼ぶことにし、すこし離れた小さな坂にあるろくべいの家を、小坂とつけた。天正十二年に開基した常徳寺は、維新まえから高島姓を名乗っていた。

子供たちも七つ八つになると、野良仕事の手伝いに役立つ。上の娘たちはいつも山や田畑につれ出されて、家に残るのは五歳のりきを頭に、三歳の太右衛門と赤児のちなである。それにおばの子の四歳になったかのと、二歳の安五郎姉弟である。もつとも鍋頭の老女と、炊事の手伝いに残る女が

二、三人はいたけれども、彼女たちは忙しくて、子供とは没交渉であつた。

四時の朝はんから、まえびり、昼めし、中茶なかちやと午前中に四回、午後からは、小びり、夕だい、夜食と三回の計七回が夏の食事で、冬になると朝はんがおそいから、まえびりがない。労働がはげしいから、腹がへるの道理ではあつても、粗食のために飢餓感が強い。二十三人の大家族の七回の食事支度でも多忙なのに、稗の精白から、栃の実を食糧にするまでの手数ときたら、大変なものである。

稗めしは上等の部で、稗の実に稗糠をまぜた糠めしが常食。めしの儉約のために、また稗の粉や、ごそば、藤の根からとった粉を食前にかいてたべる。栃の実も主食に近い量をたべるけれども、獣さえたべないほど苦味の強いものを、人間の食糧にする時間や労力ときたら、なみたいていの骨折りではなかつた。それで炊事の当番にあたる女たちは、子供が危険な遊びをしないかと、監視する程度である。

五歳のりきは、大人たちから甲斐性者とほめられ、小さな子供たちの面倒をよく見た。つぶらの中のちなが泣きやまぬと、つられて太右衛門が「かかさま、かかさーま」と泣きはじめ、安五郎まで泣きだす始末だから、ちなを泣かさぬように、りきはつぶらを揺すぶりつづけた。ちなの泣くのはいつものことだし、泣声の三部合唱がはじまると、誘われてかのが泣き、はては勝気なりきまでが泣いてしまう。

「おりよ、でつかいもんまで泣いて、痴ちけじやな」と、煮炊きに忙しい女たちが口々にいう。それでも泣くに

まかせておくから、そのにぎやかさは耳を痛くするほどである。もっとも大きな家のこととて、戸外にまで聞こえる気がいはなかつた。下二階も、そら二階と呼ぶ三階も、つしといふ四階も、床は板や竹の簀の子張りである。これは栃や栗の実の乾燥場でもあれば、その他の穀物の貯蔵場にもなり、蚕を飼う場所でもあつた。

子供たちの泣声は、上に上にとのぼって、四尺からあるあつち茅屋根に吸い消されてしまう。たとい戸外に聞こえても、氣にする人間も部落にはいなかった。部落七戸の総員が百六十八人、平均して一軒に二十四人が住んでいるのだから、どうかすれば、つぶらが三つも四つもならぶ家もある。

白川村の大家族制度は、おもにこの中切地方のものであつた。一家には血縁者ばかりが住んでいる。戸主夫婦（とと・かか）と戸主の子女。戸主の弟や姉妹に、その姉妹の子供たち。戸主の父母（じじ・ばば）と、じじの弟や姉妹たち。そしてその姉妹の子供や孫。長男夫婦（あに・あね）と、長男の弟や姉妹たち、いとこにはとこのたぐいまでの六親等ぐらの血縁者が、どの家にも同居している。

男で正式に妻を持つのは、戸主と直系相続人だけである。男は分家でさず、女たちは家についたものとして、他家には絶対に出されない。家についたそうした男や女のことを、おじをする、おばをするといひ、おじはよそのおばとなじみ、女の家へ通って行く。いわゆるつまどいであり、内縁関係をむすぶ。もちろん内縁関係といっても一夫一婦制はきびしく守られていて、女に子供が生れても女の私生児として女の生

家で育て、男の方で養育の任務をはたさなくてもよい。

中切地方^{なかつち}だけでも平瀬部落^{へいせ}のほか、尾神^{おがみ}、福島、牧、長瀬、保木^{たけ}、御母衣^{ごぼえ}、稗田、木谷などの部落があり、作男でもあるおじたちが、他家のおばのもとに通うに不自由しなかった。

家長のきびしい監視のもとに、大家族の平和と秩序が保たれ、一つ屋根下のいとこ、はとこのたぐいの男女が、仲よくなることなどまず許されないことだった。

それゆえ、辺鄙に住み、特殊な生活を固持しながら、血族結婚^{けっこん}の弊害による不具廢疾者^{ふぐふじ}もない。ときたま四肢の不自由な人間を見かけたにせよ、幼児のうちに誤って二階から転落したり、炬にころげこんだりした事故からであつた。

村全体が敬老の精神に富んでいて、子供は家の宝であつたから、家族のふえることをよろこびこそすれ、うとむことがなかつた。子供たちを泣くままに放っておくのも、多忙のためとはいえ、一面、子供たちの泣くという没我の境地をみだすのは酷だという考えにもよつた。

ちなは、大人たちの配慮や期待にそむかぬためか、手首に輪のできるほど肥つてもよく泣いた。泣けばこそ忙しい大人たちが、

「びい、泣いたら埒明かんぞ」

「よしよし、びいはほんねええ子だ」

ぐらいの声をかけてくれる。智恵というより本能で、やがて子供たちばかりのときはめつたに泣かず、大人たちが囲炉裏のまわり集る朝夕や、食事ときに泣いた。

二

ちなは二歳になつても、つぶらから出されなかつた。かかも授乳をつづけた。離乳すれば身持ちになると、かかはかく信じていた。

「ちなは、いつになつたらつぶらから出るんじやな」

と、誰かが訊くと、かかはこたえた。

「あの子をおとこねしとてな」

「なんのなんの、十三人も生む女がござるでのし」

「それでもおりは、ぼう一人しか生めんびい腹ねできとるでよ。おりなんぞは、もう子供はこれくらいでよからずも」

かかの言葉に、ためらいがなかつた。

白川郷一帯は、昔から真宗がふかく根をおろしているせいか、墮胎^{たうたい}ということをしなかつた。子供は仏さまからの授かりものといひ、子供を生む女の特権を、誇っていたくらいである。けれどもかかは、女の子ならもうほしくないと祈つた。

「女はみじめじやでよ。男のようね年に何回かはどぶ酒に酔いつぶれることも知らんし、農閑期になつても、遠い他国へ出稼ぎに行くこともできんでな。働き蜂同様に愚痴も不平もいわず、生涯を生家で働きつづけてよ、やがてほけて死んでゆかんならん。あわれなんじやで女は……」

他家のおじとなんじやでも、おなじ屋根の下に暮すことも叶わず、子を生んでも自分の自由にはならない。その点子供は授かりもので、直系の子も傍系のおばたちの私生児もへだて

なく、家長の支配のもとに育てられるものの、母親らしいよるこびと、安らぎの感情にひたれるのは、赤兒と添寝するわずかの期間だけである。

それもこれも、女の宿命としてみんな諦めていた。かかもふだんは女が損だなどと考えたこともない。ただ、眼まぐるしい仕事から仕事の合間、ほっと手をやすめて肩で吐息した瞬間、女はつまらないと考える。せめて自分の生んだ子を、自分のように不幸な目にあわせたくないと思う。

女に生れても、かかの座につける女はまだよかった。かかになるのは、選ばれた幸運な女たちだけである。もちろんそれとて、生家の人々に祝福されて嫁になったのではない。女は家についたものとのきびしい掟のもとに、たとい他家の兄から求婚されても、嫁に出してくれなかった。兄息子となじみになった女が、打合せして生家を逃げだすか、あるいは相手の兄に略奪されるかである。そのあとで仲人から、嫁の生家へ酒一升到木綿縞一反の贈物があり、縁談が成立するのであった。婚家と生家は縁戚同士として、家と家の親交をふかめても、嫁に行った以上は婚家の人間である。生家との交渉は一切断たれて、めったに里帰りもできなかった。

かかは家長につく、家の権力者である。かかは自分の子供たちの母親としての任務をはたすだけではなく、大家族全員のかかでなければならない。家長のととが、その子たちのととはかりでなく、大家族全員のととであるように――

ととは一家の財産の所有者であり、管理人であり、大家族世帯の代表者であった。村つきあいから神仏への奉仕をはじ

め、唯一の現金収入である養蚕の指示、家族の監視や統制に扶養の義務、労働着の支給、その他一切の責任をはたさねばならなかった。

かかは、夫であり家長であるとの仕事を補い、山にも田畑にも出て働く。その上、台所の司でもあった。鍋頭の老女の扶けを得ながら、家族全員の食事や健康の管理、衣類までも差配しなければならぬのである。

他家から嫁にきた女が、家つきお婆の老女たちにかこまれて、万端そつなく気をくばり、かか座の権威を保つには、身も心も強健で、忍耐強くなければとまるものではなかった。山また山で平地に乏しい大家族の家計は、いつもくるしい。大勢でわずかな田畑をたがやし、山を焼いて焼畑を作り、食糧価値のあるものは、木の根、草の芽までたべる。こうして全家族の労働の上に、かろうじて一年を食いつなぐ程度であるから、かかのやりくり上手は、一家の繁栄につながるといつても過言ではない。

「たろえものかかさは、栃をさらす（あくを抜く）のが上手で、おなじ栃餅はむ（食う）のでも、どしてこねに味がちがうかと、びっくりこいてもうた」

「たろえものかかさは、麻をつむぐのがうまいぞ。手早うて、きれいでござる」

「まことじよ。たろえものかかさは八方美人で、百姓仕事も大将で、荒牛の鼻をとって田圃にもはいりや、機を織らさつても発明（器用）じよ」

などと、部落の女たちから賞讃されるようになるまでに

は、かかの血のにじむような努力がいった。

それほど気丈な女にかかわらず、かかは子供をもう生みたくないと思った。ちなをいつまでも赤児あつかいにしたがるのも、かかの願いのあらわれである。

ちなはよちよち歩きをはじめるところになっても、遊び疲れるとつぶらにはいつて眠った。ちなのからだ一つで、つぶらが隙もなくずまづまて、もうやわらかなすべ薬を底に敷く必要がない。からだの安定を保つためにとりまく、ぼろ蒲団もいらなかった。

つぶらの中は窮屈であった。じき倦きた。だのに、木の枠が自分のからだにひしめき、しめつけてくる世界が、幼いちな安心できる唯一の場所であった。大人がそばにいたときは、つぶらの中で泣きつづけた。

「この子はよう泣く。どうしてこんね泣虫じゃろか」

「泣くには泣くが、口がきけん」

「そや、なんねもいえんな。啞じゃろか」

「啞なら泣声もあげんまい。泣くねはまことええ声で泣くんでのし」

たしかに、ちなは泣くだけである。片言もいわなかった。

ちなは三つの正月を迎えても、やっぱり口をきかなかつた。よい声で泣くし、機嫌のよいときは、声をあげて笑う。啞ではないとみんなの意見がそろった。

ある日はばが、孫娘ちなの耳もとに口をよせ、いろんな言葉を喋って反応をたしかめていたが、

「わら（おまえ）なんねも喋れんのかよ。そいとも耳が聞こ

えんがか。ばばの声が聞こえるのかよ」

ふびんでござる、と涙を流した。やがて、ばばは濡れた眼をして台所へ行った。

「なあ、かかきよ。ちなの奴あ、つんぼじゃあらまいかの？

耳つんばなら、なんもこっちのいうこと聞こえんまいで。喋ることを覚えることもできん道理じよ」

「いんにや、そんね馬鹿なことがあつてよからすか」

「そんでもよ、三つねなんでも、かたきし口をきかかん子、おりは見たことはないじよ。おみ（お身）はどうじゃ？」

「おりかて、見たことがない」

「弱ったの、えらい厄介なことじよ」

姑と嫁が、暗い台所で、顔を見合わせて嘆息した。

冬場は全員が家にこもっているから、二人の会話は、またたくまに家族みんなに知れわたった。そして、「びいはつんぼじゃとよ」と、もはや断定的である。この話は、ふかい雪にとじこめられた人々の心を、さらに暗鬱にぬりこんでしまった。

冬のあいだは男たちも、雪の始末と薬細工がおもな仕事である。俵を編み、縄をなう。一年中みんな使う足半草履や草鞋作りに精を出す。雪のときはくオソツペ、フカ靴、雪草鞋を作り、科の木の皮で蓑も作り、背負籠も作る。家中の女たちが法事や寄合に晴着を着るときにはく、紙緒の草履まで作らねばならない。

夏は五日目ごとに労働の休日があるけれども、冬は、正月、節分、初午などの節日をのぞいたほかに休日がない。こ

の休みを利用して若いおじたちは、意中のどこかの若いおばに贈るために、科の木で編む女専用の背当せあてを作るのに忙しかった。

女たちはまた麻をうみ、機を織る。

冬のあいだに麻をうむ責任量を、女たちにそれぞれ配分してある。そして一家で六十反あまりの麻布を織るのだけれども、これがまた根気のいる仕事であった。

衣食とも自給自足の経済で、織りあげた麻布は、年に一回盆の日に、家長から支給される労働着となる。男には短衣と太刀附たつづ、女には裾のながいなつ着で、これらを縫いあげるのも女の仕事である。女もふだんは義経袴であり、太刀附という山袴をはく。休日にはしんがいでつくる綿入れや、袖なし胸まるを縫うに忙しかった。

しんがいは、労働の休日に自分で勝手に働いた収穫の所得であり、公然と許されていて、じじやばば、とにかかのほかは、みんなが精出した。

どの家のおじおばも、自分で開墾したしんがいの田や畑を持っている。この、しんがいの田畑を持つ女が死ぬと、その子が受けつぐ。子供たちが大勢だと配分量がすくないから、子供も各自に田畑を開墾しなければならない。男の死んだあとのしんがいの田や畑は、家の財産となる。もちろん男は十三、四にもなれば、自分のしんがいの田を掘る。もつとも山峡のこととて、田畑になる土地は開墾されつくしているから、山を焼き、この焼畑に稗や蕎麦を蒔く。

また労働の休日には、自分のしんがいの食糧を自分で煮炊

きしなければならず、「休みにゃ、粉をかいてはむ」と、面倒がる男もいれば、女たちに糠めしを炊いてもらう裕福な男もいる。たのまれて糠めしを炊くことが、女たちにはしんがいとなるのである。

家のために働く報酬は、年になつ着一枚であつてみれば、女たちは晴着の一枚もよぶんにほしい。子供にも着せてやりたいの一心で、しんがいに精を出す。たとえば家の糸をひいて、屑繭くずぐができればもらつてためておき、越中から城端商人のきたときに売る。男たちのなつ着の綻びを縫つたり、洗濯したりする。自分で山に桑を植え、養蚕期に摘んできて、ととに買つてもらう。これは目方を覚えておき、繭や糸を売ったあとで代金を受けとる。二十貫が一元で、五十貫ぐらいは摘む。

男は親子まっついや兄弟まっついで猟に出て、熊や羚羊かめしかなどの獲物の皮や、胆を売る。伐りたおした榛はらや科の木に、平茸を栽培し、乾燥させれば一貫目七十銭から、上物で一元四十銭の相場で買いくる。背当をつくって女に売り、庄川すじの荷運びの日雇いに出る。そのほか、すべてがしんがいになった。

冬のあいだは節日以外に休日のないことを、誰も不平がってはいなかった。丈余の雪にとじこめられては、男たちは藁わらづかい、女は縫物よりほかにしんがいができず、むしろ自分の食糧をへらす必要がないから、かえつて安心して暮せるのである。

家長であることの扶養の義務とその寛大さは、この一事だ

けではなかった。男たちが、しんがいの藁づかいをやっても、藁はとこのものを利用する。しんがいの桑の木も苗のうち三年間は、誰でもとこの畑、つまり家の畑で育ててよい。一日三十三錢ほどの日雇いに行くには、家の牛をひき出した。鉾や鋤などの百姓道具をしんがいに使うのと同様に、使用料をとくに支払う必要はない。

「なあ、ちよこつと聞いてくりよ。ちなはつんぼじゃつて、まことかよ？」

繩をないながら、耳の遠い作次郎がいった。作次郎は三代まえの傍系家族である。誰も彼の年齢を知らなかった。当人すら、

「さあの、おりは八十じやろか、そいとも、九十ねなるんじやつたろかの」

と、正確ではなかったけれども、作男の頭のような存在の老翁である。

「そんなこと、まんだわからすかい」
藁を打ちながら、威勢のよい若いおじがこたえた。

「ほんねほんね、まことねあわれじやの。おりもこのごろ耳が遠うてな、辛い思いをしとるがじよ。かいらしいばさが耳つんぼじやと、まことふびんでござるでのし。いとしや、いとしやよ」

「かつたけな作じい、てまえで合点してござるぜ」

「はん、そうかい、つんぼかの、いとしや」

男たちの会話を、かかは身をはがされる思いで聞いた。ついぞかかは、老人のほかに難聴の人を見かけたことがなかつた。

た。耳の遠い老人たちの諦めや平穩の表情は、どこかとぼけた感じがよいけれども、一生、音のない世界に暮さねばならない娘はみじめすぎる。

かかの不安は、さらに嵩ばって行き、つんぼでなくて、脳の働きの弱い子ではないかと考えた。白痴の娘のたどる生涯を思うと、気が狂いそうである。

まずしい夕食どき、大家族の給仕をしながら、かかはぼろつと涙をこぼした。とこの場所である横座の左手に、三分芯のランプが一つ。あとは大きな囲炉裏のふちに、松根の脂をとますだけの照明である。家の中はいつも暗い。ただ、赤々と燃える炉火の照りかえしで、夜なべ仕事に不自由もなかった。この炉の火は、先祖から守りついでもので、消えることがなかった。大きな木株が年中くすぶりつづけていて、夜はみなしよぼしよぼと赤い眼をしている。

「かかさま、なんで泣くんじや」

かか座のそばにいた太右衛門が、母の涙を見のがさなかった。

「かかは泣かん。煙ただけじよ」

「いんにゃ泣いた、かかさまは泣いたぜよ」

太右衛門のとつびな声に、みなかかの方を見た。泣かんといったかかが、また涙を落とした。気丈なかかの涙に、みなが不安そうに顔を見合せた。

「かつ、たわけ！ おらん家はつんぼの血すじでないわい」

ととの一喝で、みんなあわてて腕の稗めしをかきこみ、かかは、かえってばらばらと涙をこぼし、はては頭にかぶつた。

いた手拭を顔におしあて、肩をふるわせた。

かかの座について十数年、いつも緊張し、こらえにこらえてきた弱氣が、堰をきったのである。さすがのとも、女房の泣くのに一瞬、呆然と箸をやすめたが、

「くそ、小便さへ行ってどすばえろ（泣け）！」と怒鳴った。

「とっさ、そう怒らっしゃるな、だいたい三つねなつても、つぶらからよう出んようなびいじや。もう、とっとこ、とっとこ歩くんじやねな。耳が聞こえんのじやろ。そんでおすこて（恐くて）つぶらから出んのじよ」

ばばが、とをなだめた。

だまって汁をすすっていたじじが、つと立ってつぶらに近よった。

「このつぶらはの、昔、おりが見つけたもんじや。おりのもんじやで。な、ええ子じやでつぶらをじじにかえしてくりよ」

じじは、つぶらからちなを抱きあげて板の間におろした。そしてつぶらを手に、厩のそばの作業場へおりて行った。すぐ樋で桶を叩きこわす音がした。

もどってきたじじの顔は、ひきしまっている。ばばが唇をとがらせた。

「こわいてまったんか？」

「ああ、もう、びいのつぶらはのうなつてしまったんじや」

「やれ、もったいしやの。なにもこわすこともないのじやに」

つぶらをうしなつたちなは、末座しんざにいろ姉りきのそばに坐つた。りきの腕に手をつっこみ、つかんだ稗めしを口に運ぶ小さな指のあいだから、黒い稗粒がばらばらとこぼれた。

三

ちなは、つんぽでも唾でもなかった。智能がおくれているでもない。ちなは口がきけるのを、はじめて発見したのはりきである。

大家族の食事ごしらえは、台所だいどころ、母屋おもや、居間いでいの三つの間にある、方五尺からの囲炉裏を使う。自在鍵は使わず、直径二尺ぐらいの大きな三本枝の金輪がおかれていて、その上に鍋を乗せる。いつもよくかわいた薪や櫛くしを燃やし、火種を絶やさぬためには、大きな木の根株がくべてある。幾日目かでの根っこが燃えつきるころ、あたらしい根っこをさしこむ。根っこは薪小屋の外に立てかけてあったりするから、雪や氷がかたくこびりついている。火が燃えうつるには時間がかった。そして、いっとき、家いっぱいに煙が立ちこめる。

「ほりや、煙を追い出せ」

板戸をあけ、風よけにたれさげてある蓆むしろもまくりあげて、煙を追いつ出すのが子供たちの仕事である。

子供たちはぼろ布を手に手に、大はしやぎで、ひろい板の間を駆けまわる。もつく、もつくと白い煙が外へ逃げ出したあと、戸のそばにあらんだ子供たちの眼に映るのは、戸外の白一色であった。

見たすかぎり、一面の雪。鎮守の森も雪綿帽子をかぶっ

た。向こうの山も、こちらの坂も、すけくろうの家も、じへいの家、茅屋根も、雪にうもれて見えだめがつかぬ。煙を吐き出している一点が、家だとわかる程度である。そして、雪はまだ降りつづく。

風に乗る雪は、するどい刃先をきらめかすかわいた雪で、子供たちはすぐ戸をしめる。風の無い日に降りしきる雪には、子供たちは声を合わせて歌いだす。

「空見りや虫じよ。まん中、綿よ。下見りや雪よ……」

ある夕暮れは雪がやみ、暗い紫にとざされつつある空の彼方に茜がさして、どうやらあすは晴れるらしい。

「てんとさまでんとさま、あつぱばかり照って、こつちばか照らぬ。こつちの子が泣くに、照っとくりよ、照っとくりよ……」

またある日、子供たちは、

「鳥はかあ、雀はちゅ。かあこい、ちゅこい、餅^{あっば}くれるにこいこい」

と歌った。雪の降りしきる日は、軒ばたの大根干葉をつつきにくる雀もいない。

ちなは、いつもりきのそばを離れなかった。じじにこわされたつぶらのかわりのように、りきの着物のしをにぎっていないと落ちつけなかった。

子供たちの歌声を、だまって聞いていたちなが、突然、りきの手を強くひき、「あつぱくりよ、あつぱくりよ」といった。啞娘がはじめて口をきいたのである。りきはおどろき、かがみこんで妹の顔をのぞいた。

「なん？ なん？ あつぱほしいんか？」

ちなは、こつくりうなずいた。

「よし、待つとれえ、いま、もらってくる」

りきは台所へ駆けた。この珍事をまず母に告げねばならない。いつそやの夕だいに、かがが声を放って泣いたことは、りきの子供心にも悲痛な図として、忘れられないものだった。母をよろこばしたい一心で、「かかさま、かかさま」と、勢いよく台所へとびこんだ。

「なんじゃ。かかさまは牛の餌^{えん}をやりに行つとるぞい」

鍋頭の老女は、なにか用かと訊いた。

「うん……。あつぱがほしいのじよ」

「客間の棚にあるぞ。りきはええ子じゃ。ちゅこいびいの守りをようしやる。按配ようね守りしろや、あつぱぐらい、どんだけでもやるでのし」

老女は黴だれた灰色の顔に似せず、やさしい眼差しである。りきは妹の口がきけるのを、もう誰にも告げないでおこうと考えた。

ちなは、やはり喋らなかつた。

「雪が消えたら、高山の医者さまね診てもらわずと考えるのじよ。おりの信心不足の罰があたつて、口のきけん子を生んだとしたら、そいなりに諦めもつこうしな」

「そんならよ、高山より越中の方へ行きやえかろう。城端やと、ええ医者さまがござらずもな」

かかとばが語った。夏場でも交通の不便な、陸の孤島である。ましてやいまはふかい雪の中、隣村へ出かけるのさえ

容易なわざではない。

けれども春がきて、向こう山の雪も消えないうちに、田圃仕事をはじめた。奥飛驒の秋は早く訪れる。四月半ばに靄をおろし、秋十月には刈りあげてしまわねばならない。それに四月の声を聞くとき、焼畑仕事も忙しくなる。当然にかかも忙しい日がつづく。

ちなを医者に診せたいと念願しながら、かかは口にだせなかった。もっともかかは、村うちから一步も外に出たことがない。せめてちなが五、六歳になって、家族の誰かに、医者へつれて行ってもらう方法がなかった。

田植がすみ、ほっと安心したころ、

「ちなは口がきけるんじゃないやろか？」

「おいよ、おりもそんな気がする。ありやびいの声じゃと思つたが、りきとなんやら喋っていたぞい」

「そうや、おりも忙しいで氣にかけんじやつたが、まこと、ちながものをいうているのを、聞いたことがあったのし」などと女たちが噂しはじめた。子供たちに訊けば、ちなは喋れるのだという。

夏になった。ちなは安五郎や太右衛門と、わらべ唄を歌った。かほそい声である。

秋がきて、ちなは大人たちのまえでは、けつして口をきかなかった。以前、大人のいるときはきまって泣いたのに、今度はかたくなに、喋ろうとはしない。おかしな子、かつたけな子、とみんながいった。

そして冬——といつても十一月の末、ちなははじめて大人

のまえで「おすがいい」といった。

最初に聞いたのは、ばばである。そのときはばばは、臉をうす赤く濡らしたまま放心していた。顔を上向け、まえ齒をむきだし、自信なげな口調でちなが「おすがいいの」というのに、「そうじよ。この世の地獄じゃ、まことねおすがやの」とこたえたまま、孫娘がだしぬけに口をきいた現実について、疑惑も抱かず感動もしなかった。

このことが幼いちなに、喋ることの勇氣をあたえた。ちなは台所や炊事場みんじやにいる女たちをつかまえ、あるいは山から帰ってきたり、火事人足から帰った男たちの太刀附の裾をつかんで「おすがいいの」と、首をふるわせ、からだをふるわせつけた。

人々は昂奮し、動揺していて、ちなが明瞭に口をきいたことに不審を抱かず、

「そや、どえらいおすがいいことじゃ」

と、もつれる口調でこたえたのである。

その恐い事件というのは、二里庄川上流にある木谷部落の火事であった。木谷部落はせまいくぼ地に、七軒の合掌造りが隣り合つて建つてい、そのうちの六軒までが、またたくまに灰になった。

ばばの生家も焼けうせた。火元の家では、小屋での夜なべ仕事のと、燈明の不始末が原因で村人が火を発見したときは、小屋の茅屋根が燃えぬけ、母家の下手樽風てづかふうに燃えうつっていたという。茅屋根は夏は涼しく、冬は温かであつても、いったん火がまわれば紙屑同様に燃えひろがる。階下の柱一

本も燃えぬうちに、屋根がきれいに燃え落ちてしまう。

「まるで火の粉がよ、まっ赤なかたまりになって、ぼたんぼたん和潼のように落ちてきたんじやと。なあもとりだす暇がのうて、ごっそり焼いてしまったんじやとよ」

「今年は極も豊年、栗もぎよさん拾って、どこの衆も二階にどっさりことあげてござったというでのし。穀も稗も、あらかた焼かされたんじやと」

「それでも、どの衆も仏壇だけは持ち出せたんやそうな。これも先祖さまのお蔭じょ」

人々は蒼ざめて声をふるわし、火はおすがいとくりかえした。

火事見舞には、早速米一升到稗五升、科しなの木の皮や、縄やねそなどを屈ける。科やねその木は、釘一本使わぬ合掌の屋根組みに、大量に必要であるが、なによりの見舞は労働力である。火事見舞、手伝いの人々は、焼けだされて呆然としている人々を励ましながら焼跡を片づけ、一週間も経たぬうちに四軒のまた建と、二軒の柱建の合掌造りにとりかかった。

また建は地面から屋根を葺いた、天地根元宮造様式の素朴なものである。経済事情などからの臨時のもので、仮の住居のこととて、「仮屋」と呼ぶ。本建築の柱建を「母屋」といった。

切妻合掌造りの大建築は、部分的には大工や工人などの専門家が参加するが、また建は村人の協力を得ての作業によって建つ。仮屋とはいえ大きなもので、このまた建の二階で、翌年はどの家も五十貫からの蒔をとるほどの養蚕に励んだ。

個人の所有物といえば、足袋から手拭まで、大きな風呂敷包みにまとまってしまふほど、日々の暮しめずしい人々である。質素なこうした人々にとって、雨露をしのぐ家が唯一の財産だ。ましておりが家、おりたちの家が、巨大な茅屋根の合掌造りであることは、大きな誇りであり、焼けうせた家の再建が、おなじく火にもろい茅屋根であることに、いささかの疑問も持たなかった。ただ人々は、おりたちの家を、たちまち灰にしてしまふ火を恐れ、火をだいにする。木谷部落の火事のと、どの部落でも交替に、夜と昼の見まわりをして歩いた。星は拍子木を叩き、夜は丑三つ刻に金輪のついた鉄棒をひきずりながら、一戸一戸に火の用心を告げて歩く。

ちなは、おすがいと口走った日からなんでも喋れ、星うちに火の見まわり当番が、「火の番、だいにさっしやれや!」と、戸口で叫ぶのへ、

「あーい、御大儀でござる。ようござりましたや」と節づけも大人の真似で、大きな声でこたえた。

四

いつまでもつぶらを出なかった子、泣いてばかりいた子、ながいあいだ大人のまえて口をきかなかった子のちなは、小学校へあがるころには、近所の女の子とすこしも変わるところがなかった。

小学校は、明治八年に御母衣みほろに設置された簡易小学校が廃校になり、四里川下の白川村小学校が本校である。中切地方八部落の子供は、中切分校へ通学する。